

公衆衛生 書評

「WHO をゆく —感染症との闘いを超えて—

評者 堀田 力 弁護士/さわやか福祉財団理事長

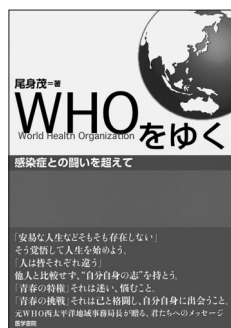
読みはじめたら止まらなくなった。そこらの小説より、ずっと面白い。

「医学」という言葉の人間味に魅かれて医学を志した筆者は、「地域医療」という言葉にひかれて自治医科大学に進み、離島勤務を経て、WHO(世界保健機関)に飛び込む。

最初の担当が、西太平洋地域におけるポリオの根絶。この途方もない難題に真正面から取り組んだ筆者は、アジア諸国を駆け回り、専門家を集めて大がかりな戦略を立て、ワクチン購入の資金を集め、諸国の政治家を説得し、ついに中国全土の第2子以降を含む子ども8000人にポリオワクチンを投与するに至る。着任後4年目。そして目標どおり、10年にしてポリオを根絶する。

その功あってWHO西太平洋地域事務局長に選ばれた筆者を迎えるのは、結核、そして2003年のSARS(重症急性呼吸器症候群)。その制圧の物語は、壮大な政治・外交の物語であり、志を抱く医師の国際協力の物語であり、そして世界中の人々が、新しく出現した強力な感染症のおそれから救い出される感動の物語である。フィクションをまったく交えない挑戦の過程が、淡々と描き出される。

尾身 茂(著)、頁176 2011年
定価2,940円(本体2,800円+税5%)、医学書院刊



局長としての10年を含む20年間、WHOで力量を存分に発揮した筆者を、社会が手離すはずはない。帰国した筆者を待つのは、鳥インフルエンザ。

筆者の識見も生かされ、これも治まるが、筆者は考える。「毎年出現する新しいウイルス。これは、文明病だ」と。

そういう発想から、筆者は、日本の医療問題に突き当たる。「医療が、医療だけの世界に閉じこもっていたのでは、新しく発生している諸問題を解決できない」。心を含めた患者の全体像をとらえ、福祉などと連携し、まず地域において患者を受け止める。その精神で、東日本大震災の被災地の医療にも取り組む、行動力あふれる筆者。その体験からあふれ出る「総合医」など「21世紀の医学・医療」に関する提言は、医療関係者だけでなく、すべての人が受け止めて、みんなのために、みんなで実現していきたい、「地域医療」への道を示してくれている。